
とある無能力者と超能力者

クイックロード

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある無能力者と超能力者

【Nコード】

N9472J

【作者名】

クイッククロッド

【あらすじ】

レベル5第二位、『スクール』のリーダー 垣根帝督。

レベル0幻想殺し、『とある高校』に通う高校生 上条当麻。

レベル5とレベル0が交差する時、

『勘違い』は始まる

幻想殺しと未元物質 1 (前書き)

禁書目録系統のFFは初めて書くので、矛盾点などがあるかもしれません。

原作ネタバレ注意。

時系列としては、14巻と15巻の間です。

幻想殺しと未元物質 1

とある無能力者レベル0と超能力者レベル5

至って普通（本人談）な高校一年生、上条当麻は毎度毎度な『不幸を味わっていた。』

先日までアビニオンで、土御門元春や五和と共に『C文書』の破壊に勤めていた彼が居るのは、『とある高校』の前、つまり校門である。

そして、彼の足元には大量の紙束が いや、それだけではない。先日雨が降ったせいか、水溜りが路上に出来ていたのである。

つまり、 転んだ上条の手から離れた学生カバンの中身が大量にばら撒かれ、水溜りに浸かってしまったのである。

更に、学生カバンの中身は吹寄制理ふきよせいりから頂いた、一端覽祭の『企画書』その他もろもろである。

これは真面目にヤバイ事になった訳で 『企画書』が台無しになったという事は、吹寄おでこDXが待ち受けている。地獄だ。そして不幸だ

(うわあっ……数日続きだった雨が止んだから色々と後先良いぜ！、とか思ってたらかこれかよ！？ 上条さんは今日も平常運転なのですよ！！ セーの、不幸だあッ！！)

心の中でシャウトする上条。

しかし、彼の叫びは誰にも届かないのであった。

1

学園都市の暗部組織『スクール』のリーダーかつ、超能力者レベル5第二位の垣根帝督かきねていとくは第七学区の道を歩いていた。

正確に言つと、上条が通う『とある高校』の近くだ。

垣根帝督の目的は簡単である。

『『グループ』の構成員、土御門元春を潰す事』。

『スクール』は　というより、垣根が　近々、学園都市に対するアクションを起こすつもりでいるのだ。

そこで、『グループ』が邪魔になる可能性がある……何といても、『グループ』には土御門どころかあの一方通行や、『座標移動』のムすじめあわき結標淡稀なんか居たりする。

スペック的には、遥かに『スクール』を上回っている訳だ。

そこで重要となるのが、『グループ』の土御門。

彼は『グループ』のブレインといっても過言では無い存在で、彼を失うだけで『グループ』の行動力は大分下がる。スペックダウンだ。

『スクール』が動き出せば、当然『グループ』が妨害を開始する。

それを抑える為にも、土御門を潰しておいた方が良いのだ。

最も、『行動』で何も情報を得られなければ、一方通行を潰して『メインプラン』となるしかない　一方通行の方は色々と手を工夫すれば、位置を特定できる。

例え『グループ』が潰れて、一方通行が『スクール』の妨害に現れなくとも、コチラから一方通行を見つけ出せば良いだけの話である。

そして、垣根帝督は事前に『ゴーグルの少年』から土御門の情報を貰っている。

『ツンツン頭で、サングラスを掛けている』　との事だった。

『ゴーグルの少年』は土御門の髪色について、誤解の無いように説明する　とも言っていたのだが、垣根は断って来ていた。

例え髪色を説明されなくとも、そんな物凄い特徴があれば他人と誤解する事も無い。

そして、垣根の足が止まる。

彼の目は、『とある高校』に注がれていた。

幻想殺しと未元物質 1 (後書き)

次話がいつになるかは分かりませんが、亀更新な可能性高しです。
気が向けば、垣根以外のレベル5とも上条を会わせようかな、なんて思ってます。

(特に七位のすごいパンチ！を会わせたいです、ハイ)

幻想殺しと未元物質 2

「待ちなさい！ 上条っ、貴様！……！」

「うわああああああっ！！ お許しくださいいいいい！！！！
吹寄サマあああああー！！」

絶叫アンド全力疾走中の上条の後に続くのは吹寄制理。

男である上条が疾走しようとも、普通に追いかけてくるトンデモ女だ。

……普通、スタミナやら何やらは女の方が劣っているはずなのだが……
吹寄を見てみると、そういった認識は間違っているんじゃないか？
と思わず考え込んでしまう。

何故、上条がおでこDXに追いかけるられる羽目になったかという
と……だ。

数十分前に遡らなければならない。

「うわああっ！ ホントにどうしょ！？ これ！？」

大量にバラ撒かれた紙束の傍にしゃがみ込み、上条は絶叫する。
紙達は水にダイブして命を捨ててしまっているので、毎度ながらに
上条は不幸だ。

そして、やはり 彼の不幸は止まってくれない。

「あれ？ 上条、学校に残るなんて珍しいわね」

「あ……、ああ！ あ、ああああっああああっ！」

声に振り向いた上条が確認したのは、……。

照りつく太陽を反射するおでこ、長い髪……そう吹寄制理であった。

上条の絶叫を聞いた吹寄は首を傾げ、鞆を片手に持ちながらこちら
へ歩いてくる。

「気味悪い叫びを上げないでちょうだい。……って、あ……」

上条に近付いた彼女は一箇所視線を落とし、動きを止める。

それを見た上条はわたわたと手を振りながら、

「い、いやっ！ チガウンデスヨ、フキヨセサン？ これは事故で
ありましてね」

「……貴様は……貴様は、そんなに私達の邪魔をしたいのか
ッ……！」

「うわあああああああああああつ、不幸だあああああああ
ああああ……！」

3

という訳である。

「おおおおおおおッ！ 上条さんはまだまだやる事があるん
ですッ！ こんな所で人生を終わらせて堪るか……！」

絶叫し、上条は角を曲がる。

周囲の学校帰りの生徒からの視線が痛い、そんな事を気にしてい
られるだけの余裕は無い。

チラッと視線を後ろへ向けた上条は少しだけ安堵する。

「まだ来てない……よし、撤くなら今の内！」

言うなり、上条は裏路地の怪しげなアクセサリ屋の中へと入っていく。

4

吹寄制理は上条が逃げ込んだ裏路地へと曲がった。

が、背中を見せて逃げている筈の上条の姿が無い。

尚も視線を走らせたが、居ない事を確認すると吹寄は肩を落とした。

「まあいいや……明日になったら覚えておきなさいよ、上条。地獄を見せてやるわ」

言うだけ言うと、吹寄は背中を見せて去っていく。

小柄な背中には疲労が見えるようであった。

5

垣根帝督は落胆していた。

とある高校の内部に踏み込んだのだが、教師達に聞いても土御門元春はもう帰りましたよ、としか言われなかった。

が、垣根帝督はこれで下がろうとはしない。

（この学校だけじゃなく、他の場所も探してみるべきだな。下校時間から大して時間経って無いみたいだしよ……そこら辺にいるだろ）

そんな考え方で裏路地に踏み込んだのだが、
彼は見た。

黒い学ランに、ツンツン頭、そして……サングラスの男を。

「（土御門元春！？ まさか、こんな簡単に会えるとはな……）」

実はツンツンサングラス男は吹寄から逃げる為に変装した上条なのだが、最も、変装とは言えない程低レベルな物だが。誰がどう見ても上条だ。垣根帝督はそれを知らない。

ゴーグルの少年から土御門元春の髪色を聞いていれば誤解も無かつただろうに。

垣根帝督が演算を行うと同時に、未元物質で作られた衝撃波が飛ぶ。

「ッ!?!」

実はこの上条当麻、能力の前兆感知が可能だ。衝撃波が発生した事により、衝撃波の軌道上の物体が細やかに揺れていた。

当然、上条がそれを察知しない筈が無い。

咄嗟に右腕が伸び、衝撃波を打ち消す。

それでも衝撃波の余波が発生し、先程購入したばかりのサングラスが砕けたが、上条は気にしない。

右腕をコキリと鳴らすと、金髪の男を。垣根帝督を捉えた。

「……テメエ、誰だ?」

「垣根帝督、とでも名乗っておこうか。レベル5第二位だ。さて、『グループ』の土御門元春君。俺はオマエを殺す為にここに来た訳だ」

幻想殺しと未元物質 3

(グループ……？ 良く分からねえが、コイツは俺を土御門と勘違いしてるみたいだな。 土御門の危険を拭ってやりたいし、ここは戦うしか無いか。 相手は第二位。油断は禁物だ)

思い、上条は腕を回す。

対する垣根は首をコキコキと鳴らしていた。

数秒の睨み合いが続いた後

「おおおおおッ！」

「……！」

上条が拳を握って駆け出し、それを見た垣根が未元物質を生成する。二発目の衝撃波が飛んだ。

(くっ……！ さすがはレベル5……、攻撃の仕組みがさっぱり分からねえッ！)

右腕で衝撃波を打ち消し、上条は思う。

（また衝撃波を消された……？ 「冗談じゃねえ。 それこそ一方通行^{アクセラレ}か削板軍覇並みの攻撃力じゃねえと、あの衝撃波は相殺出来ねえぞ……。 土御門元春の能力は何だ？）

考えながら、再び未元物質を操作する。
今度こそ、本気で。

ブワッ！ と、垣根の背中が弾けた。
そして、現れたのは 神々しい光を放つ、三対の翼だった。

「なっ……っ！？」

「もうお前は生きて帰れねえぞ 現存の常識は、この未元物質には通用しねえんだからな。 テメエの能力がどれだけ強力であれ、これには敵わねえ」

太陽光を殺傷光線に変える。
これなら、さすがに土御門は死ぬ筈だ。

そう思っていた垣根だが。

（何だ……？ 翼の動きが上に向いてる……？ 上から攻撃を仕掛けるつもりか！？）

そう思った上条は、右腕を真上に掲げた。
結果、垣根帝督が繰り出した殺人光線は消滅する。

全力で翳した右腕に、一枚の翼が触れた。
同時、ビーズをばら撒くように翼が砕けた。

その様子を見た垣根は確信する。

(間違い、ねえ………！ アイツは………幻想殺しだ！)

6

イマジンブレイカー
アケセラレータ
幻想殺し。
レールガン
一方通行や超電磁砲と同じく、アレイスターの計画に必要な存在である。

土御門元春と同じ学校だとは聞いていたが……まさか、こんな形で会う事になるとは。

そんな事を考えながら、垣根は隣に座る黒髪ツンツン頭の少年へ視線を移した。

彼らがいるのはとある公園だ。

そして、彼らが腰掛けているのはそこに設置されているベンチである。

あれから、騒ぎを起こしてしまった二人はアンチスキルから逃れる為に、スタコラとトンスラした訳である。

「……いやあ、マジですまねえな。お前を土御門だと勘違いしちゃった」

陽気に笑いながら語る垣根だが、上条の表情は晴れない。

「……お前、何で土御門の事狙ってたんだよ……」

言われた垣根は考える。

アレイスターのプランに関わっているとはいえ、上条当麻は一般人だ。

暗部の存在を知られる訳にはいかない。

「土御門とは仕事仲間だな。毎回毎回、こつやって腕試しみたいな事をやってたよ」

「……う、腕試し……っ!? 土御門はレベル5第二位の攻撃を迎撃できるのかよ!?!」

「ああ、まあな……。『裏』の世界には対・超能力者用の武器が出回ってるぞ」

「へえ……」

案外簡単に納得してしまう上条。

垣根の言葉に色々と穴がある事には気付かない。

暫く黙る二人だが、垣根が口を開いた。

「お前、学園都市の『裏』って分かるかよ？」

「……裏？」

問われた上条は疑問符を打ちながらも、ある出来事を思い出していた。

絶対能力進化実験。

「……それがどうしたんだよ？」

警戒しながら尋ねる上条だったが、垣根は首を振った。

「いや、何でもねえ。んじやな。俺にも仕事入ってるからよ」

「お、ちよっ……待てよ！」

何かが引つ掛かった上条は呼び止めようとするのだが、垣根はひらと手を振ると夕暮れの中を歩いて行ってしまった。

「……つたく、意味分からなかった……。というか、土御門にも仕事仲間がいるんだな」

「おーい、カミヤーン！」

笑みを浮かべながら呟いた上条は、そこで馴染みな声を聞いた。顔を上げ、近付いてきた土御門を隣に座らせる。

「どうしたんだよ、土御門」

「いやあ、カミヤん……忠告しに来たぜい。吹寄さんが何かピリピリしてるんだが、『アイツ……見てなさいよ』とか言ってるんだよな。もしかしたら、カミヤんかなと思っただにゃー」

「……うわあああああああああああッ！！！！
？？？？」

思い出し、上条は絶叫する。
同時に、こう思った。

明日は地獄になりそうだな……、と。

「お、落ち着けてカミヤん！！……その様子だと、カミヤんのせいみたいだにゃー。」

「うわああ……マジでどうしよう……！ 土御門、助けて……！」
「おでこDXを受ける勇氣は無いんだにゃー」

「そんなあ……！？ あ、そういえば土御門。お前の仕事仲間がここに来てたぞ」
「……？」

垣根帝督は『スクール』のアジトへと向かっていた。彼の乗る車の窓は怪しげなカーテンで隠されている。ちなみに、運転しているのは下部組織の者だ。

何も見えない黒カーテンで隠された窓へ顔を向けながら、垣根は思う。

(…………どうやら、真っ向からやるしか無いみたいだな…………。『グループ』との決戦だ)

結果は単純な物となった。

数日後、『スクール』は『グループ』に敗れたのだ。

垣根帝督は脳を三つに分けられ、冷蔵庫のような大きな機材を付けられた『能力を吐き出す機械』となってしまった。

幻想殺しと未元物質 3 (後書き)

これにて完結！

無理やりな所、意味不明な所もありましたが、
皆さん、応援ありがとうございました！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9472j/>

とある無能力者と超能力者

2010年10月10日14時26分発行